

## Wilfred R. Bion 研究 (IV—2)

### ——「不在の乳房」の抑うつ的極点とその出立——

祖父江 典 人

#### I、はじめに

前稿(2005)において筆者は、Bion, W.R.のいわゆる「認識論的精神分析の時代」の前期、すなわち1960年代の『経験から学ぶこと』(以下『経験』と略記)(1962b)までの著作を取り上げ、この時期のBion精神分析の真髓に迫ろうとした。そこで浮き彫りになってきたことは、Bionの精神分析的認識論は“不在の認識”を肝とし、しかもその認識の仕方には、妄想分裂ポジションレベルでの“剥奪感”であれ、抑うつポジションレベルでの“分離感”であれ、“心的苦痛を伴う不在の認識”という“抑うつ的次元”で扱おうとしていることが析出された。簡明に言えば、Bionは妄想分裂ポジションにしる、抑うつポジションにしる、こころの“痛みpain”に精神分析の照準を絞ったのである。これは、Klein, M.が“不安”に焦点をあて、こころのふたつの機能の水準を区分したのに対して、Bionは“痛み”にそれを持ってくることによって、そのふたつの水準を“止揚”させたとも言える。こうして妄想分裂ポジションと抑うつポジションは、悲哀の色を滲ませた“痛み”によって通底したのだ。

もうひとつ忘れてはならないのは、そもそもこの「不在の認識」を可能にするものとして、Bionが独創的な思考理論を提唱したことだろう。それがアルファ機能であり、その働きのもとに生成された情動的思考としての「知ること」、すなわちKである。さらにこのアルファ機能には、「夢見ることdreaming」という最深層のこころの働きがあり、私たちは目覚めている間でさえ、生の情動体験(ベータ要素)を「夢見ること」によって「無意識の思考」「夢思考」に変換しているという。

このようにBionは、無意識化された思考にプライマリーな価値を置く思考理論を展開して行ったのだが、ここで注意しなければならないのが、「対象が不在

でなければ、問題はどこにもない」（『変形』）という、やはりBion一流の「不在の乳房」への目配りだ。Bionは決して“不在”から視線を外すことはなく、彼の認識論・思考理論は「不在の乳房」の“消化”を“痛み”に焦点を当てることにより、構築されたといえる。そこにおいては、「よい乳房」は脇役以下の役割しか果たしていない。比喩的に言えば、Bionの認識論においては、「不在の乳房」（「剥奪」「分離」）が主演となり、精神分析の舞台上で、妄想分裂的、抑うつ的痛みを演じ分け、成長していく姿を描いているのである。

ここまでが「精神分析的認識論の時代」前期のBion精神分析の中核テーマだと考えられるが、これ以降Bionは、少しずつ「不在の乳房」に対するスタンスを変えていく。『変形』（Bion, W.R. 1965）あたりでその姿は次第に明らかな形を明示してくる。

まずは、Bionの精神分析的認識論の極点に達したといわれる『精神分析の要素』（以下『要素』と略記）（1963b）から、後期のBionの姿を紐解いていこう。

## Ⅱ、「不在の乳房」の抑うつ的極点

### 1) グリッドの考想

Bionは前著『経験』を認識論的に突き詰めたものとして、さらに記号化、抽象化を押し進め、『要素』において「グリッド」の着想として結実化させる。これは『経験』においてもくろまれていた、「経験から学ぶこと」のまさに記号版と言ってよい<sup>注1)</sup>。

グリッドの解説は、Bionのいわんとするところが難解なだけに<sup>注2)</sup>、骨の折れるところだが、その中心概念が示されている『要素』を軸に、それとほぼ同時期に書かれたと目されるグリッドに関する論文（Bion, W.R. 1963b）、1971年におけるロサンゼルス精神分析協会での口演録（Bion, W.R. 1977）なども参照しながら、次に紹介したい。

グリッドの縦軸は思考の生成・発達を示し、横軸は思考の使用法を表わしている。

縦軸は、「分類法的というよりもむしろ生成論的な提示であり」、その発達は次の4つのことに依拠している（『要素』）。すなわち、a) 心的機制、b) 特殊

The Grid

	Definitory Hypotheses (定義的仮説) 1	$\psi$ (プサイ) 2	Notation (表記) 3	Attention (注意) 4	Inquiry (探求) 5	Action (行為) 6	...n.
A $\beta$ -elements (ベータ要素)	A 1	A 2				A 6	
B $\alpha$ -elements (アルファ要素)	B 1	B 2	B 3	B 4	B 5	B 6	...Bn
C Dream Thoughts, Dream, Myths (夢思考、夢、神話)	C 1	C 2	C 3	C 4	C 5	C 6	...Cn
D Pre-conception (前概念)	D 1	D 2	D 3	D 4	D 5	D 6	...Dn
E Conception (コンセプション)	E 1	E 2	E 3	E 4	E 5	E 6	...En
F Concept (コンセプト)	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6	...Fn
G Scientific Deductive System (科学的演繹体系)		G 2					
H Algebraic Calculus (代数学的計算式)							

化と普遍化（具象化と抽象化）の交替、c) 連続的な飽和、d) 情動的欲動、である。

カテゴリー A の「ベータ要素」は、「思考が生じる場所と想定できる最早期の母胎」(『要素』) であり、アルファ機能の力を借りて次のカテゴリー B の「アルファ要素」に変換される。アルファ要素とは、すでに前稿で詳しく見てきたように、“貯蔵に適した情動的思考の素” である。カテゴリー A のベータ要素以外、未飽和の要素を含み、すべてのカテゴリーは次のカテゴリーに対する前概念として機能する。そして、この前概念が現実と出会い、実感が生じたときに、思考が発達する。それが縦軸の思考の発達を基礎づける<sup>注3)</sup>。そして、カテゴリー C 以下のより高次で抽象化された思考プロセスを育てていくのだ。

カテゴリー C の「夢思考、夢、神話」は、「ベータ要素およびアルファ要素が

先に存在することに依存し」（『要素』）、「夢、神話、物語、幻覚において出現する」（Bion,W.R.1977）。すなわち、夢や神話のような視覚イメージによって、私たちは顕在思考の下の「夢思考」を表現しているのである。カテゴリーDは、「前概念」であり、Kantの「空の思考」であり、誕生直後の乳児が乳房の期待を実感で満たされるのを待っているような心的状態である<sup>注4</sup>。カテゴリーEの「コンセプション」は、その期待が満たされ、前概念と実感がつがったところから結果される概念の形成である。「前概念がそれにとっても近い実感と触れ合わされることになると、その心的な結果が、あるひとつのコンセプションである」（Bion,W.R.1962a）。カテゴリーFの「コンセプト」は、コンセプションから由来するさらに広い概念の構築であり、たとえば「精神分析理論、科学的だが非分析的な理論、いわゆる自然の法則、さまざまな学問分野による既存の構成概念」（Bion,W.R.1977）などがこれに相当する。カテゴリーGの「科学的演繹体系」は、「仮説および仮説の体系における概念の組み合わせを意味する」（『要素』）。すなわち、それぞれの仮説や概念間の有機的で論理的な結合により、科学的演繹体系は各概念の総和以上の意味を創出する。カテゴリーHの「代数学的計算式」は、たとえば科学的演繹体系を計算式で表現したものである。Bionは、代数学的計算式などの高度に数学的な抽象概念を、さしずめ思考の“最上級”に位置づけた。

もっともここで注意すべき点は、カテゴリーGやHが思考の“終着駅”とは必ずしもBionは考えてはいない、ということである。GからCなどへの“もの想い”もありうるからだ。すなわち、高度で抽象化された思考から原始的思考への「負の成長」である。「負の成長のための能力が必要とされるのは、一部には意味を失った定式化を再び生き生きとさせるため」（『要素』）である。この考え方は、特に1970年代以降の「Bion精神分析第四期」において、ラディカルな姿形を明示し始める。

横軸は、『要素』において「内省によって大部分の分析家に示されると私が考えるのは、分析家が比較的少ない数の理論を用いており、以下のいずれかに入るだろうということである」と述べられ、6つの思考の使用法の分類が示されている。これらは、自我機能の諸側面と考えてよい。Bionは、Freud,S. (1911)

の「精神現象の二原則に関する定式」から「表記」「注意」「探求」「行為」を借用し、さらに「カンタニアン類似のふたつのカテゴリー」(Sandler,P.C.2005)である「定義的仮説」と「 $\psi$ プサイ」を追加し、合計6つの横軸を案出した。

コラム1の「定義的仮説」は、「患者であるあなたが今経験しているものを、(中略)抑うつと呼ぶだろう」(『要素』)というような“定義”である。「このカテゴリーに適する言述は、以前には無関係とみなされていた要素が、絶え間なく連結し合い、まとまりを帯びた徴候を示す」(Bion,W.R.1963b)。すなわち、先の例でいえば、抑うつという定義は、それまで無関係とみなされていた要素が結合した結果、概念としてのまとまりを帯び、定義的仮説という「変化の余地のない言明」(Bion,W.R.1977)にまで至ったのである。もうひとつBionの発言から引用すれば、「日の出に出発しましょうということばが、出発の時刻に関する定義的仮説なら、それは議論の余地のないことだ。天文学者が天文学的にはそのことばは不適切だとみなしたり、神学者が『神々に対する不遜hubris』のことばだと言ったりしたところで、この定義的仮説を論駁したことにはならない。これが私の定義的仮説の定義だ」(Bion,W.R.1977)。すなわち、定義的仮説は、ある観点から意味のまとまりを帯びた要素が見出され、名づけられたなら、それが自己矛盾していない限り、議論を待たない頑迷さを有し、別の視界からの展望を拒否する、ということであろう。ちなみにSandler,P.C.(2005)はもっと簡明に、定義的仮説は「直観的前概念の原始的等価物であり、(中略)おそらくは本能的資質に結びついている」と片付けている。

コラム2の「プサイ $\psi$ 」は、「分析家には抵抗の表現として知られた現象に近い」(Bion,W.R.1963b)。すなわち、それは、未知への不安を否認するような偽りの陳述として働き、“変化への抵抗”となる。

コラム3以降は、先に述べたようにFreud,S.からの借用である。コラム3の「表記」は、自我機能の記憶や表記に近似する。4の「注意」は、同様に自我機能の注意に近く、コラム5の「探求」よりも「もっと受動的受容的で、もの想いに相当する」(『要素』)。すなわち、「自由に漂う注意」だ。コラム5の「探求」は、当初Bionはこれを「エディプス」と名づけていたように、真実に対する断固とした探求を意味する。分析場面でそれに該当するのは、「そのまま

は曖昧なままに残る素材を説明しようとして、患者にさらに素材を連想することを促すために用いられる解釈」（『要素』）である。コラム6の「行為」は、Freud,S.のいう「心的装置から刺激の増大を除去するためにもくろまれた運動放出に似る」（Bion,W.R.1963b）。すなわち、“行動化”だ。

横軸と縦軸の関係性に関しては、「1から6の軸の一つの使用法が他のものへと変形される移行の機制は、回避や修正で用いられるものであり、その力動は快感と苦痛」（『要素』）であり、それは縦軸のPS⇔Dの思考生成の機制に依拠している、とBionは述べる。すなわち、「解体と再統合、PS⇔D」のプロセスにおける思考の各様態を、私たちは「快感と苦痛」に左右され、さまざまに“使用”していると言えようか。

ここでBion自身がグリッドを使用した簡単な実例を『要素』から抽出しよう。Bionは、ある患者が「私はあなたが私を嫌っているのを知っています」と述べたと想定して、グリッドの使用法を論じる。もしこの患者の言が「偽装された放屁」であり、思考以前のプリミティブな感覚印象なら、カテゴリーAのベータ要素と査定できる。もしこれが、患者の見た夢に関連するか、空想の一部であるなら、カテゴリーB、Cに属する。カテゴリーCなら、横軸は、分析の休暇が切迫している場合には、「中断は亡命に関係」してC6として表れるかもしれない。カテゴリーC5に合うならば、「好奇心を追究することになる決心の強化が予想され」、C2なら、「新しい素材が現れることへの抵抗の強化」が見出されるかもしれない。さらに、この患者の言がA6に属するならば、それは「行動として使用されたベータ要素と見なされるべきことを示す」。その際には、面接自体も「増加した刺激の蓄積をここから取り除くため」の「筋肉運動」となる。それによって、患者は「分析家から憎まれているという感情にもはや煩わされないこの状態を達成」する。すなわち、面接は、苦痛な憎悪をここから排除するための行動化として“使用”されているのである。

臨床の“肉感”を削ぎ落としていくような、このようなグリッドの使用による患者の陳述の抽象化は、臨床に本当に役立つものであろうか。そのような声が聞かれても不思議ではない。さらにBion自身も「この形式的な表は、臨床的アプローチには縁遠く見えるかもしれない硬直した雰囲気を与える」（『要素』）

と述べているので、グリッドの持つ情感のなさには自覚的だったようだ。どこまでこのグリッドが分析家の実用に供されているかは疑わしいところがある。

だが、そのグリッド使用に関して、「面接時間が終わったあと、グリッドはどのように熟考され使用されるべきだ」と、Bionが賞賛の意を表した論文があることも事実だ。Kurth,F.(1981)が著したその論文には、Freud症例のヒステリー患者、フォン・エミー夫人がグリッドの素材として取り上げられている。Kurthはヒステリーの場合、「経験から学ぶこと」への妨害は、セックスと関連しており、その問題は会話の問題として精神分析的面接の中に出現する、と論じる。そこから彼は、言語的交流の妨害としてのコラム2の表れを、縦軸のカテゴリーにさまざまに当てはめ分類する。そして、コラム2の心氣的要素が心氣的「哀しみ」に変形した自験例なども提示しながら、「実験的道具」としてのグリッド使用の試みを例示している。Bionがこの論文のどこを賞賛したのかは定かではないが、新たな考えや変化が生まれ出ることへの妨害物であるコラム2に関して、その複雑さや変形可能性への意義を詳細に見ていこうとしたところに、グリッド使用の臨床的意義が窺える例なのであろう。

さて、グリッドの考えやその使用法に関してはおおよそ理解されたところだろう。その意義については賛否両論あろうが、Bionが野心的で実験的な思考装置を提唱したことには異論の余地はないところだ。

ではいったいBionがグリッドを考案した動機はそもそもどこにあるのだろうか。これほど思考の抽象化を推し進めた熱意の所在は何だろうか。その点こそ、問われてしかるべきところであろう。しかも、ここに「不在の乳房」のテーマがふたたび浮上してくる契機があるのだ。

## 2) 「グリッド」と「不在の乳房」

『要素』の中には、次の言及がある。「本書の主題は、面接自体の外で、分析的作業について記録の代わりに創造的な思考をすることである。それは、音楽家の音階や訓練に似て、直観を鋭くし発達させる練習を提供する。最初は骨の折れる知性化の成果である結論に、直ちにたどり着くことがますますできるようになるのである」。また、『再考』(Bion,W.R.1967)の「注解」の中では、「結

局私は、ノートを取ることを全く辞めてしまった。（中略）その理由のひとつは、もっとも効果的なノートは、感覚印象の表象にもっとも近づけるものだからだ」と言い、その後にグリッド使用がかりそめにもこの目的のために作られた、と付け加えている。さらに別のところでは、「グリッドは分析セッション中には使用されるべきではない」（Bion,W.R.1977）と明言している。

こうみえてくると、グリッド使用のさし当たっての目的は、“分析場面以外での、直観を鋭くするための分析家の日々の訓練”と括ってよさそうである。

その一方でBionは、グリッドの持つ“客観性”“科学性”に関しても言及している。「表記体系によって、分析家は時間が経ってからも自分自身で理解ができ、重大な意味の損失なしに他人に伝えられる記録を作成できなければならない。（中略）精神分析が発達するためには、数学的表記法が事実を記録するように、精神分析的作業を記録する表記法が発見されなければならない」（『経験』）。ここにはBionが、グリッドのような記録法によって、分析家の直観訓練の用ばかりでなく、精神分析の科学性や伝達可能な表記法への確立に向けて並々ならぬ意欲を見せていることがうかがえる。

Grotstein、J.S.（2003）によれば、BionはAnna FreudとKlein,M.らとの間で生じた児童分析を巡る論争にたいそうこころ痛めた。臨床観察と定式化との間にもっと正確な科学的言語があったなら、「大論争」は修復可能だったのに、と考えたという。その結果、Bionは精神分析を機能や因子のように数学化する傾向に走ったのではないかとGrotsteinは指摘している。この推測は、グリッドの科学性を巡る上記Bionの発言を一部裏付けているかもしれない。さらに福本（1999）は、統合失調症という未踏の領野への道標としての必要性、精神分析は非科学的だという他学派からの批判への返答を動機のひとつとして挙げている。

これらがグリッド考案へのBionの動機として浮上してくる見解だが、その熱意の所在に関して完全には説得力を持つわけではない。なぜなら、これらの諸説にはBionの“個人的情念”に迫るような強度を持った“思想”が垣間見えてこないからだ。筆者には、Bionの記号化、抽象化、数学化へのなみなみならぬ情熱には、Bionの人生を通底しているような、“個人的事情”が秘められているように予感されるのだ。



その視点からもう一度Bionの著作に当たってみよう。『変形』において、これまで看取されてこなかった意外な風景が透けて見えてくる。グリッドに関してBionが言い及んでいる箇所を抜き出してみよう。

「要するに、この理論は観察することと、対象の現前なしに科学的に操作するのに適した言葉で記録することを助けるべきである」。「精神分析的思考法が要求するものは、表記の方法とその使用法のための規則である。それは、作業が対象の不在においてなされ、対象の現前においてさらに促進することを可能とする」。

このあとBionは、精神病患者においては、対象の不在においては思考することがかなわず、“不在”は“無—物no-thing”という具象物と化し、物理的性質のように他者に投影同一化されてしまう。したがって、グリッドのような表記法を発達させることには失敗すると想定して、論を進めている。

ここで注目されてよいのは、前稿で詳論したような“不在の認識論”が、グリッドの使用の基底に展開されていることだ。「対象の現前なしに科学的に操作するのに適した言葉で記録」するのがグリッドであり、この言い回しにおいて、“対象の現前なしに”に力点があるのは至極明瞭だろう。なぜなら、精神病患者は「対象の不在において作業するために語や思考を操作するという意味での思考することは、まさにできないことのように思われる」からだ。

グリッドにおいても、Bionはやはり「不在の乳房」の“陰影”を色濃く引き摺っている。グリッドは、“不在”の思考化に向けて仕掛けられた装置でもあるのだ。その「不在の乳房」が認識論的にどのような決着を迎えるのか、次に見ていきたい。このことは、Bionのグリッドへの“個人的情念”をさらに鮮明にしてくれることだろう。

### 3) グリッド概念の頂点

Bionは『変形』の中で、「不在の乳房」を突き詰めて概念化していった場合、どこに辿り着くのか、そのヒントになるような言表をところどころに散りばめている。

「問題は、不在の乳房すなわち『無—乳房 (no-breast)』が乳房と異なるとい

う事実を中心としている。もしもこれが受け入れられるならば、『無-乳房』は、点の視覚像によって表現されうる。「私は『位置』を乳房がかつてあったところと記述した」。「私は点や直線を、乳房やペニスがあった場所から区別し難い対象として記述した」。

これらの言明に示されているのは、彼が、“点”や“直線”を“乳房”や“ペニス”がかつてあった場所や空間を示すものとみている、ということだ。さらに、それらの不在の痕跡としての“乳房”や“ペニス”が、高度な数学や幾何学に通底している、と考えていることは、次の言表の中に明瞭に示されている。

「私が仮定するのは、点は元来ある感情によって占められていた空間だったが、『無-感情』、あるいは、ある感情がかつてあった空間になった、ということである。（中略）科学の発達において意義のある幾何学の体系は、そのような未飽和の諸要素であると見なされうる。ユークリッド幾何学には、空間の諸現実化の中に、多くの近似物があることが見出されてきた。ユークリッド幾何学は、空間の経験から派生したと想定されている。私が示唆しているのは、その精神内界の起源は感情、情動、その他の心的経験が『あった』場所である『空間』の経験である、ということだ。幾何学者たちが練り上げてきた点や線を支配する規則は、『心的現象があった場所（あるいは空間）』によって置き換えられた情動的現象へと遡行することによって、再考察されるかもしれない」（『変形』）。

Bionは数学の起源を、“情動的経験がかつてあった場所”に置いている。さらに、その情動的経験の痕が、抑うつポジションにおける徹底したワーク・スルーの達成によって、“点”や“直線”の記号化に導かれ、ユークリッド幾何学の礎を築くに至った、と考えているのだ。しかも、その点や直線が、「ふたつの乳房が消滅した。あるいはおそらく、それらは縮み消えていって、ふたつの点だけが残った」（『変形』）というように、「情動的現象への遡行」によって、ことさら「不在の乳房」にまっすぐに連結していることも明瞭だ。

このように、カテゴリーHの「代数的計算式」や幾何学の中に、Bionは抑うつポジションの究極の達成を見ていた。グリッドとは、対象の“不在”に力点を置いた、高度に抽象化された概念装置として考案されたものであり、その

抽象化の結晶である「代数学的計算式」とは、「不在の乳房」の認識論的な“極限の姿”でもあったのだ。

Bionは、こうして幼少期には空想癖、質問癖、「筋肉防衛」によって「不在の乳房」の苛烈さを塗り固め、精神分析家になるに連れて、「不在の乳房」を“無いことへの痛み”として認識論的に捕捉していき、遂にはグリッドによって、認識論の極限、抑うつ的次元の極点にまで昇り詰め、「不在の乳房」との“決着”をつけようと試みたのではないか。そこにBionのグリッドに対する“個人的情念”の起源も存すると、筆者には思われるのだ。

こうしてBionの「不在の乳房」は、記号化の中にその情念のひとまず“終着駅”を見たのであろうか。Bionの「ふたつの乳房」は、「縮み消えていって、ふたつの点」として、認識論の彼方に“成仏”していったのだろうか。

答えは、否！である。Bionは、この認識論の果てから、ぐるりと向きを変え、さらなる未知の領野に船出する。

### Ⅲ、「究極の現実〇」——「不在の乳房」の抑うつ的次元からの出立

#### 1) 精神分析的認識論の果て—「変形理論」

Bionは、1965年に『変形』を著し、精神分析の新たな作業に着手した。

「本書を通じて私が提唱するのは、精神分析の実践への批判的な接近の方法であって、新しい精神分析理論ではない。(中略) ふたつの概念、すなわち変形と不変性 (invariance) が導入された。本書はそれらの概念およびそれらを精神分析的実践の問題に適用することへと捧げられている」

この書の題名にもなっている「変形」が主要なコンセプトとなっており、さらに「不変性」が新たなキー・ワードとして追加されている。Bionがこの書の冒頭に挙げているビネットから、まずは「変形」の意図するところを探ってみよう。

「画家がヒナゲシの広がった野原を通る小道を見て、それを描くと想定しよう。出来事の連鎖の一方の端にはヒナゲシの野原があり、もう一方には、表面に絵具を配置されたキャンパスがある。私たちは、後者が前者を表現していると認識できる。そこで私は、ヒナゲシの野原と一枚のキャンパスの違い、そし

て芸術家が自分の見たものを絵の形にするために加えた変形（transformation）にもかかわらず、何かは変わらずに残っており、認識はこの何かに依拠していると想定することにする。変形の変わらない側面を構成するようになる諸要素を、私は不変物（invariants）と呼ぶことにする」。

ここで論じられていることは、ヒナゲシの花“そのもの”が「不変物」として存在するとするなら、画家の描く絵はその「不変物」に依拠して認識された「変形」の産物であることが、主張されている。さらにBionは続ける。「課題なのは、精神分析の下で不変なものとは何か、その相関関係の性質は何かを見出すことである」。

前著『要素』からわずか2年後に書かれたこの著作だが、これらの言明には、Bionが精神分析における認識のスタンスを少しずつずらし始めたことを物語っているように思われる。なぜなら、Bionはここで、精神分析の射程として、「不変なもの」に照準を絞り始めたからである。

Bion精神分析のこれ以降の思索の要となる「不変なもの」へと論議を勇む前に、Bionが「変形」によって意図するところをもう少し見ていこう。

「精神分析が変形のグループに属しているとみなすことは、私の目的にとって好都合である。最初の経験（現実化）——画家の例では彼が描く主題、精神分析家の例では彼の患者を分析する経験——は、描くこと及び分析することによって、それぞれ絵画及び精神的な記述へと変形される。分析の過程で与えられる精神的な解釈は、変形のこの同じグループに属するとみなしうる。解釈は変形である。ある仕方では感じられ述べられた経験は、不変物をはっきり見せるために『解釈において』他の仕方では述べられる」。

画家が“絵画”によって「最初の経験」を「変形」するのと同じく、精神分析家は“解釈”によって「変形」を施すのである。したがって、Bionはこう述べる。「『理論』という用語に属する連想を考慮して、私は『変形』という用語を選ぶ」。精神分析においては、「不変物をはっきり見せるため」の「理論」が「変形」だ、と説かれているのだ。Bionは、「連想の陰影」のこびりついた、手垢の汚れた用語を使うことに持ち前の抵抗があり、「変形」という用語を採用しているが、結局は精神分析における「変形」とは、「精神分析理論」に他ならない。

その理論は、次のような考えの下に記号化される——変形行為の操作全体を  $T$ 、変形の過程を  $T\alpha$ 、そして最終産物を  $T\beta$ ——。

この視座に立てば、「変形」とグリッドが絡んでくるのも必然だろう。Bion は、簡単な例を取り上げる。その患者は入室時に慣習に従って分析家と握手した。握手の意味するところが、患者が夢の中で分析家について経験した、敵意の否認をもくろんだ無意識的な心的過程とするなら、それはグリッドの  $C2$  に記号化される。すなわち、 $T\alpha = C2$  である。そして、このプロセスが進行した最終産物である  $T\beta$  が、「患者が私の握手を彼への性的攻撃として経験していたと示唆する証拠があると想定し」「患者がこれを思考や観念、あるいは夢としてさえてなく、実際の事実として経験している」とするなら、グリッドのカテゴリーは  $A1$  に相当する。したがって、この情動的経験は、 $T=C2 \rightarrow A1$  の等式で表現できる、という。

このように Bion の変形理論は、グリッドを別の“バーテクス (頂点)” から見ようとした“景観”でもあるのだ。そして、その変形の基本パターンには 3 種ある、と言う。すなわち、「硬直運動変形」、「投影変形」、「幻覚症における変形」である。Bion は簡単なひとつの例を提出している。

「ある患者は牛乳配達人が来たことと怒って報告した。患者は私に怒っていて、不機嫌になった。(中略) 私には、牛乳配達人が来たこと、そして患者が牛乳配達人と私との間を少しも区別していないことが確かだった。反対に、面接室の中の私の存在は、牛乳配達人が来たことから区別されていなかった。この現象は転移とは異なる。患者によっては、牛乳配達人の訪問を私との関係の中で生じてくる情動を表わすために用いるかもしれず、それは、それに応じて解釈できるだろう。その変形は硬直運動の集合に属している」。

すなわち、この一節で述べられている前半の変形が、「投影変形」となる。ここでは、過剰な投影同一化によって、分析家と牛乳配達人の区別がもはや成立せず、患者は分析家を牛乳配達人と同一化して、不機嫌さを顕にしているのである。後者の「硬直運動変形」は、患者と分析家の認知レベルにおける区別は明瞭についているが、情動的に牛乳配達人と同じ怒りを分析家に向ける現象である。すなわち、神経症レベルでの「父親転移」「母親転移」と呼ばれるような

集合に属した、情動の“置き換え”である。Grinberg, L. et al. (1975) の簡明な説明を借りれば、硬直運動変形は、「人格の非精神病的部分が優勢な」、Freud, S. の用いた意味での転移に相当し、投影変形は、「精神病的不安であり、病的分裂、投影同一化などの防衛が特徴的な」クライン派の理論によってよく定義されるような転移のタイプである<sup>注5)</sup>。

「幻覚症における変形」は、「投影変形」よりもさらに精神病部分が人格全体を支配してしまい、その最終産物 ( $T\beta$ ) が“幻覚”になるような変形である。患者の観点からすれば、「分析行為は羨望、競争、憎悪が、同情、相互補完、寛大さに対して優位であることを確立することである」（『変形』）。すなわち、患者の分析の目的は幻覚による“羨望”の実現となる。

この3種類の変形は、いずれも転移や治療関係の様相と密接に関連して表出される、臨床的にも観察可能な現象だといえる。

それに対して、Bionは『変形』の最後の方でいきなり「Oにおける変形」を提唱した。これは上記3種の「変形」とは異なり、現象として観察できる事象というよりも、理念的、哲学的なモデルである。そもそもOとはいったい何なのか。そこから議論を始める必要がある。しかも、この「Oにおける変形」の論議が、Bionの「不在の乳房」に新たな景観をもたらしているのだ。

## 2) 「究極の現実O」と「不在の乳房」

“O”とは何か？ Bionの述べるところにしたがって、『変形』をひとわたり概観しておこう。

「物自体、すなわち（カントの意味で）不可知なものとしてみなすことが役に立つ限りで、この事実は記号Oによって表示される」、「私がOに現実（各人はその印象をTの過程に従わせる）を表示させたとき、私はカントが不可知の物自体として記述しているものを念頭に置いていた」、「面接の間に起こった何か、それがセッションの絶対的事実である。私たちは何が絶対的事実であるかを決して知りえないが、私はそれを記号Oによって表示する」、「分析セッションで起こることすなわち物自体Oを知ることは誰にもできない。私たちが語ることができるのは、ただ、分析家または患者が起きていると感じること、すなわち

情動的経験のみであり、私はそれをTによって表示する」。

Bionがここで言っているのは、Oとは「絶対的事実」であり、本性上「不可知のもの」である。その不可知な「物自体」としてのOから、私たちが得ることができるのは、知識としての(Kとしての)情動的経験であり、「Oからの変形」の結果としてのTβのみである、ということだ。

もっともO概念<sup>注6)</sup>には、哲学からの影響が如実に窺える。筆者は哲学には不案内なので、十分に論を尽くせるわけではないが、この方向に視線を送り遣ることによって、O概念の持つ奥行きをさらに鮮明にできるのではないかと考える。そればかりではなく、O概念を含むBionの哲学的嗜好の中には、「不在の乳房」論に繋がるような瞠目すべき特徴も存するように思われるのだ。

O概念は、そもそもBion自身、Kant,Iの「物自体」を念頭においたものだと明言している。「物自体」概念自体、難解さを含むが、Bionの言うように、さしあたり人の理性や認識では到達しきれない“不可知”な事実や世界の存在を言い表したものだと考えてよいだろう。したがって、私たちが“経験”しているこの世の事実は、「物自体」に由来するが、それから“変形”された産物、すなわちTβに過ぎない。Bionは世界のさまざまな事象、現象の背後に不可知の到達不可能な“真実”を想定していると言ってよい。それが、Bion自身、Oを「究極の現実」と述べているゆえんでもある。

この考え方の理路は、Platoの「形相」「イデア」論とも響き合う。Bionはこう述べる。プラトンの「形相」は、「私がそのことばを理解するところでは、美しい対象の出現のようなさまざまな現象が意義を持つのは、それらが美しかったり良かったりするからではなく、それらが一度知られていたがもはや知られない美や善を、見る者に『想起させる』のに役立つからである。この対象が『形相』であり、現象はそれを想起させるものとして役立つ。私はプラトンが、前概念・クライン派の内的対象・生得的な期待の支持者であると主張する。(中略) Oの意義は『プラトンの形相』から由来し、それに内在している」(『変形』)。

Platoの「形相」や「イデア」論は、ここでBionが言及しているように、「一度知られていたがもはや知られない美や善を、見るものに『想起させる』」対象であり、その対象である“形相の想起されたもの”がこの世の“現象”だ、と

いうことである。簡単に言えば、現実世界は“仮象の世界”であり、その向こう側に想起によってしか知ることのできない、真実性としての「アイデア」の世界があるということだ。したがって、Oも到達不可能な「アイデア」や「形相」の世界に属する“住人”なのである<sup>注7)</sup>。

Kantの「物自体」にしるPlatoの「形相」にしる、Bionは到達不可能な“絶対的”で“真実”の世界を理念的に想定していることは疑い得ない。すなわち、Bionの哲学的・理念的嗜好性は、絶対的真実を探求しようとする“真理主義”に寄り添っているのである。もちろん、Bionが若かりし頃、カント哲学者のPatton,H.J.から薫陶を受けたことも、この“偏愛”に大きく寄与していることだろう。しかし、Sandler,P.C.（2006）がBionの哲学的、数学的、物理学的系譜を、その著作から丹念に調べ上げた労作の中に如実に示されているように、Bionの哲学的素養は実に幅広い。すなわち、PlatoやAristotleなどの古代ギリシア哲学からBacon,TやDescartes、R.の中世、ルネッサンス時代の哲学者を踏破し、Hegel,W.F.やNietzsche,Fなどの近代哲学者まで万遍なく読みこなしている<sup>注8)</sup>。それなのに、Schermer,V.L.（2003）がいみじくも指摘するように、「物自体」のような「不可知の非感覚的な現実というカンタニアン的な仮説を選択することは、当時の時代潮流にそぐわないことだった」。Bionの時代には、経験主義、後には現象学や構造主義が主潮であり、「Bionはその時代潮流に対抗して、伝統的、貴族的立場を採ったのである」（Schermer,V.L.2003）。

現代思想においては、「物自体」のような形而上学的、超越的概念は、もはや“古典”の部類に属している。「普遍性」「真実性」「絶対性」などのBionお気に入りの“真理主義”も、どこか“いかがわしいもの”と感じられ、現象学やポスト・モダン思想が台頭してすでに久しい。先のSandlerやSchermerも言及するように、Bionはそれらの新たな時代の息吹を同時代人として当然知っていたはずである。しかも、Bionは、Kantを批判した論理実証主義者であるRussell,B.とも個人的交流を持っていた（Schermer,V.L.2003）。そうでありながらも、論理システム全般に対する批判には無頓着で、『要素』において代数学システムの有用性をグリッドに取り入れた。このあたり、Kantの「物自体」に入れ込んだのと同じく、Bionは論理的絶対性をも追求している。“絶対なるもの”に“真”を置



く点で、グリッドもOも機を一にしているところがある<sup>注9)</sup>。

しかし、これとは違った視点からO概念を眺望しようとした試みもある。Grotstein, J.S. (2000, 2004a, b) の論考だ。彼が主張するには、OはHeidegger, M. に繋がるような「存在論的概念」である<sup>注10)</sup>。さらに「Oは現存在の単なる別名である」(Grotstein, J.S. 2000) とまで言いきっている。この解釈には、なかなか悩ましい問題が孕まれている。なぜならHeidegger自身は、Platoのイデア論は超越的な真理の世界を實在とするような形而上学であると糾弾し、それに立脚した、Kantを含むヨーロッパ哲学の伝統にも批判の矛先を向けたからだ。したがって、Grotsteinの言うように、Heideggerの存在論をBionのO概念に一直線に結びつけるのには、無理がある。

だが、ことはそれで終わらない。なぜなら、BionのO概念には、『注意と解釈』以降、「神性godhead」「無限Infinite」のように、「物自体」やイデアの世界の“理念的實在”から、「物自体」の“存在意義”の方に、次第に重心をずらしていった節が見られるからだ。すなわち、KantやPlatoのような、絶対的で至高の世界を想定した“超越的實在論”から、Heideggerのような、存在することの本質を問い詰めようとする“存在論”への視点の移動が言えなくもない。したがって、Grotsteinの主張は、『注意と解釈』(Bion, W.R. 1970) 以降のBionのO概念の密かな「変形」を喝破した洞見にも見える。

しかし、筆者の理解するところでは、その見解にはやはり賛成しかねる。なぜなら、Bionの「神性」や「無限」は、究極の現実の“實在”を前提にしたものではないにしろ、多分にカンタニアン由来の超越論的概念の色が濃い。それに対して、Heideggerの「存在論」は、超越論的立場から「存在了解」の成立を根拠付けようとするものではなく、「世界内存在」、「共存在」としての人間という視点から、事物と人間、人と人との存在論的成立の根拠を問うていこうとするものに思われるからだ。したがって、Heideggerの思想には、「他者と共にある」ことに伴う存在自体の“間主観的了解可能性”の視点が、多分にその思想に内包されている。

したがって、筆者の観点からすれば、BionのO概念は、『注意と解釈』以後の後期においても、「神性」や「無限」といったOに内在する“絶対的真實”を問

い詰めようとする姿勢にやはり変わりはないように思われる。その点において、“共存在的で”“間主観的”な存在の了解可能性を探るHeideggerの「存在論」とは一線を画していると考えられるのだ。簡単に言えば、BionはやはりHeideggerよりもKant、Platoに近い超越論的観点の持ち主なのだ。

このことにこだわったのには、単なる哲学的空談ではなく、「不在の乳房」を巡る筆者なりの重大な意味があるからである。それは、先の議論に密接に絡んでくる。すなわち、Bionは当時の時代潮流に反して、なぜカンタニアン的“絶対の真実”を追い求めたのか、というテーマとして再浮上する。

もとより、この問題に“正解”があるわけではない。しかし、筆者なりの“情動的思考”による解答を紡ぎ出せば、この問題はBionの人生や精神分析の底流に一貫して鳴り響いている、「不在の乳房」のテーゼと通底しているように思われてならない。

すでに前稿までに述べてきたように、Bionは自らの「不在の乳房」体験そのものを、いかに認識論的に昇華するかということに彼の精神分析に対する熱情は掛けられていた。何度も言うが、それほど“原体験”としての「不在の乳房」は、Bionにとって過酷なものであったのだ。

幼少期に遭遇した魔可不思議な「世界との断裂」、それを埋めようとした「質問癡」や「白昼夢」、その後の母国インドである“乳房との別離”、孤独に晒された寄宿舎時代、「筋肉防衛」の成功の際としてのレジオン・ドヌール賞の受賞、その裏にある“唯一の生存者”という極限の戦争体験、婚約者からのいきなりの破談通知、妻ベティの突然の死等の数々、青年期までのBionの人生においては、“世界との断裂”を象徴する「不在の乳房」が、突然恐ろしい深淵を足元に覗かせ、Bionを“言いしれぬ恐怖nameless dread”に突き落としてきたと言える<sup>注11)</sup>。Bionは、それに対して、「白昼夢」や「筋肉防衛」、精神分析家になって以降は「精神分析的認識論」の強力な武器を手にし、「不在の乳房」を認識論の果てに“葬り去ろう”としてきたのではないか。Bionにとって、彼の人生を翻弄した「不在の乳房」は、まさに「物自体」、「 $\beta$ 要素」として御し難く、しかも圧倒的な“現実感”をもって、彼の存在を呑みこもうとしてきた。その「不在の乳房」の“真実味”を前にして、Bionの認識論は唯一無二の真実を求める

方向へと駆り立てられ、間主観的な「現象学」や「存在論」、テキストの多義性を主張するような「ポスト・モダン思想」が入りこむ余地はなかったように思われるのだ。「不在の乳房」は認識論の領野においても、Bionにとっては、“アイデア”であり“超越項”であり“物自体”であり“絶対的な真実”として感受されたのである。ポスト・モダンの手法では、悲劇的現実をくぐり抜けたBionにとって、“生ぬるすぎる”のだ<sup>注12)</sup>。

さて、ここまで筆者は、BionのO概念が哲学的系譜を持ち、しかもそれが“超越論的”立場から“絶対的真実”の探求を志向するような“情熱”を孕み、その“情熱”の起源は、Bionの「不在の乳房」の“原点”に求められることを述べてきた。すなわち、BionのO概念には「不在の乳房」が通奏底音として鳴り響いているのだ。

だが、それにしてもBionはなぜ“O”という記号を採用したのだろうか。Oは記号として何を指し示しているのだろうか。そもそも何かの頭文字なのだろうか。この論議は現在まで諸家によってさまざまに語られてきたところだが、未だ一定の決着を見たとは言えない。これは、Oに迫るもうひとつのなぞである。この項を閉じるに当たって、最後にこの点に関して考えてみたい。

Bion自身はOの表記の由来に関して、以下のようなヒントを提供している。「分析セッションが提供する素材は、患者の反応の起源origin (O) であるいくつかの事実」(『変形』)。さらに同じく『変形』では、通常でない見方と通常の見方を区別する際に、直交座標をモデルとして使用すると、「座標は二軸が点Oで交わる、代数学的幾何学者によって用いられるものに類比される。KはOの右に、-Kは左に位置するだろう」と述べている。さらには『未来の回想』(Bion,W.R.1991) 第I部「夢」の中には“O=zero”という表記がある。しかし、その一方で『ブラジル講義』(Bion,W.R.1990) の中では、Oは数学におけるゼロと同じものではなく、それと似ているが、違った側面を保持しているということも語られている。

Bion自身のOに関する言及をひとつわたり見渡せば、O表記は、起源originとしてのOか、ゼロzeroとしてのOかに近似した記号と考えて間違いはないだろう。だが、Bion一流の「連想の陰影」の“こびりつき”を嫌うがゆえに、Oに決定

的な意味を被せたくはなかったようだ。したがって、そこからさまざまなO表記に関する“憶測”が沸き起こる。その多くは、Bionの言及を追認したレベルに留まるが、なかには“新説”も登場する。

まず、Shermer, V.L. (2003) は、「Oは何がしかプライマルな母親、すなわち海原 ‘O’ ceanに関係しているように思われる」と言及している。すなわち、Oは、Oceanの頭文字から採ったものではないか、ということだ。Bléandonu, G. (1994)になると、“新説”を飛び越え、“珍説”の可笑しさがある。「有名なエロティック小説、『O嬢の物語』のタイトルの、このOという母音は、その丸さにおいて女性性器を象徴しているのではないか」と言及し、BionのOも、それに関連しているかのように匂わせている。すなわち、O=女性性器という可能性だ。

筆者もここで彼らに便乗して“新説”を飛ばしたい。筆者の主張は、O=乳房の痕、すなわち「不在の乳房」だということだ。これはあながち“あてずっぽ”というわけでもない。

そもそもBionには、点が「乳房のあった場所」の記号化だという言及があったことは、すでに見てきたところだ。なかでもそれは、「その点（・）と「点」ということばは、『無-乳房』の感覚可能な顕現として受け取っている」、「ふたつの乳房が消滅した。それらは縮み消えていってふたつの点だけが残った」（『変形』）という言表に端的に表れている。言うまでもなく乳房は、基本的に丸の形姿を持つ。それが「縮み消えた」点も、丸に近い形になるところだろう。したがって、筆者は、O=丸=乳房の痕=「不在の乳房」という等式を主張したい。

このことは、単なる“ことば遊び”的なレベルの意義に留まらない、と筆者は考える。なぜなら、O=「不在の乳房」という等式は、次に見ていくように、「Oにおける変形」における「不在の乳房」の“実存的意義”をよく示してくれるからだ。

### 3) Oにおける変形(KnowingからBecomingへ)：精神分析的認識論の彼岸へ

「Oにおける変形」は、『変形』の最後の部分で、Bionが俄かに提出してきた

概念であり、先に見たように他の3種の「変形」とは趣を異にする。すなわち、他の変形が臨床的にも説明可能であったり観察可能であったりする現象として提起されているのに対して、「Oにおける変形」は、「Oになることbecoming O」とも表現されるように、抽象的で哲学的で捉えがたいことは否めない。

まずは、Bion自身の言明から見ていこう。「Oにおける変形」は、最初に登場した時こう定義された。「私はOの意義を現実や『なること』の領域をカバーするように拡張したい。Oにおける変形は、他の変形と対照的である。前者は、なることにおける成長と関連している。後者は、成長に『ついて知ること』における成長と関連している。ただそれらは、『成長』が両者に共通する点において、互いに類似している」。

Bionがここで言っているのは、「成長」のプロセスにおいて、“情動的に知ること”としてのKの他に、「Oになることbecoming O」という成長の次元がある、ということである。Bionは「成長」に新たな次元を追加したのだ。さらに、Bionはこう言う。「解釈は、現実について知ることから、現実になることへの移行をさらに進めるようなものであるべきだ」、「問題のポイントは、『現象』を『知ること』から、『現象』で『あること』にどのように移行するか、である。それこそが『真』である」。しかも、「知ること」よりも、「あること」「なること」の方が“真”であり、“本当”の成長であると言っているのだ<sup>注13)</sup>。

では、いったい「Oにおける変形」、すなわち、「Oになること」「Oであること」は、どのような「成長」なのだろうか。それに関連したBionの言表を見てみよう。

「精神分析的解釈を通じて、現実の自己の現象を知ることから、現実の自己であることへの移行をもたらすことは可能なのだろうか」、「私たちは、Kから『なること』や『あること』への移行がもたらされるためには、どんな種類の変形( $T\alpha \rightarrow T\beta$ )が必要とされるのか、知る必要がある。ガリレオ、ニュートン、デカルトによる微分法の発見は、K現象を生命のない次元で扱う上で十分な武器を生み出した。しかし、それは成長を生み出すのではない。単に成長についての知識の増加を許容するのみだ」(『変形』)。

Bionはここで、「Kにおける変形」が「現実の自己の現象を知る」ことである

のに対して、「Oにおける変形」は、「現実の自己であること」、すなわち“自己そのもの”になる、あるいは“自分自身の真実になる”ことだ、と言っているように考えられる。しかも、『要素』において、精神分析的認識論の極限を探求し、思考生成のグリッド縦軸において最高位に位置付けた「代数学的計算式」の“微分法”に対して、Bionは、「それは成長を生み出すのではない。単に成長についての知識の増加を許容するのみだ」、と切り捨てるが如きの“価値下げ”を表明している。このあたり、あきらかにBionの認識論は“転向”の兆しを見せているのだ。

さらにBionは、「Oになること」の内奥へと踏みこんでいく。「極端な例では、『Oになること』に関わる解釈は、誇大妄想、あるいは精神科医や世間が誇大的な妄想、またはその他重篤な病理的障害を暗示する診断と不可分のものだとして怖れられる」。また、その解釈は「自分の『気を狂わせる』ことを含んだり、自分自身あるいは誰かを殺すことを犯したり、あるいは“責任”を持つようになり、その結果罪悪感を覚えてしまう」ような解釈でもあるのだ。すなわち、私たちは「Oになること」、私たち自身の“自己そのものになること”によって、“誇大妄想に陥ったり”“気が狂ったり”“殺人を犯したり”する境域にまで辿り着いてしまうかもしれないのだ。それほど「Oになること」の営みは危険に満ちている。

Bionは、このことを $T\beta \rightarrow T \supset K \rightarrow T\beta O$ という、思考の発達を遡行するかのよ  
うな代数式を用いて表現している。すなわち、最終産物 $T\beta$ は、一端 $K$ によって  
“知りうるもの”に戻され、そこからその“体現”“具現物”としての $T\beta O$ に  
“なられる”のだ。その $T\beta O$ が、狂気や精神障害を結果するかもしれない、と  
Bionは言っているのである。簡明に言えば、私たちはあるがままの自分になる  
ことによって、逆に“狂気”に立ち返るかもしれない、ということだ。

これはいったい何を意味するのだろうか。Bionの視線の先には、何が見えて  
いるのだろうか。私には次のように思える。

Bionは、PSポジションへの突入を図ろうとしているのである。PSの産物で  
ある“狂気”や“殺人”の中にさえ、さらに言えば精神病者の具象的体験世界  
の中にこそ、 $K$ による変形を蒙っていない、原石のような“真実”が埋もれて

いると考えたのではないだろうか。ことばを換えれば、Bionはグリッドの認識論の頂点から遡行し、縦軸Aの $\beta$ 要素に「なること」を決行しているのだ。そして、PSの中に“真実”に繋がるような積極的な意味を見出そうとしているのである。

したがってBionはこの後、Kによって満たされてしまわない「空虚で形なき無限」、すなわち「空白」や「余白」をも最大限尊重する途につく。Kによって“飽和”されてしまったら、空白から“真実”が顕現する余地は残されないからだ。

Bionのこの認識論の“転向”はなぜもたらされたのだろうか。ここに後期Bion、あるいはBion精神分析全体の最大のなぞが隠されていると言ってもよい。この解明への糸口としては、「1968年のカリフォルニアへの移住」(Symington, J. & N. 1996)、「認識論の限界への気づき」(Bléandonu, G. 1994) など諸説あるが、筆者にはこの“転向”の最大の内的動因は、Bion個人の「不在の乳房」の中に存するのではないか、と考える。

Bionは、認識論をかなぐり捨て、“不在の乳房それ自体”の中へ突入しようとしたのだ。そうだとすれば、それは、“狂気”と“死”の運命が待ち構えているかもしれない「Oにおける変形」のBion自身による“実存的実践”に他ならない。

「精神分析自体は虎の皮の縞模様には過ぎない。精神分析は最終的には、虎に出会うかもしれない。すなわち、物自体のOに」(『未来の回想 I』)。

Bionは晩年になって、“虎”に再会したのである。その虎とは、インドの幼少期、猛獣ハンターのBionの父親によって殺された雄虎を探して、猟銃キャンプの外で咆哮していた、あの“雌虎”かもしれない。あるいは、「それは虎なのか、いや違う。虎は猫に過ぎない。アルフ、アルフ、アルファーのイギリスのちっぽけな歴史。おまえはのろわれたハイエナだ！」(『未来の回想 I』)の、アルフ・アルファーかもしれない。アルフ・アルファー Arf Arferとは、Bionが幼少期に“世界との懸隔”を痛感したとき、おもむろに出現したBionの白昼夢だ(祖父江、2003)。

Bionの「不在の乳房」は、“虎”や“アルフ・アルファー”などさまざまに姿

を変え、Bionの幼少期を脅かした。そして、その極限の“反復強迫”として、戦争における瀕死体験が位置づけられ、その後も妻の死などの“のろわれたハイエナ”にBionは“出会って”きたのだ。

Bionは晩年に至り、“肉感を削ぎ落とした”抑うつ的次元の抽象性ではなく、妄想分裂ポジションの“血肉踊る生々しい”次元で、「不在の乳房」との“最終決着”をつけたかったのではなからうか。そこにこそ、“本物の虎”に出会う術がある、とBionは考えたように思われてならない。

#### IV、終わりに代えて—Bionを通底する「不在の乳房」の“陰影”

Bionは認識論の果てに、「物自体」としての“虎”を見た。その虎とは、Bionの人生や精神分析に一貫して影を落としてきた、「不在の乳房」の“幻像”であったに違いない。おそらくBionにとって、その“幻像”は、抑うつ的次元としての“ことば”“概念”“代数的計算式”に抽象化していくには、あまりにも視覚的な“表意文字”であったり、実体的な“表意行動”であったりしたのではないか。結局のところ、Bionの「不在の乳房」は、抑うつ的次元のこの世の“正気”では、“成仏”しきれなかったのだ。

そのあたりの消息は、何度も述べたように、Bionの人生を少し振りかえれば察するに余りあるところである。実際にBionは、フラッシュバックの“亡霊”にとりつかれた、“戦争神経症”であったかもしれないのだから。

Bionは、いよいよ「不在の乳房」と正面から対峙し、その懐深く入りこみ、‘becoming’することを企てた。Bionがその辺境の地に立って見た風景、そこで体感した境地はどのようなものだったのだろうか。次項において論考したい。

果たしてBionは“虎”になり得たのだろうか？

注1) Ferreira, R.B.P.M.(2000)も指摘するように、グリッドははじめから現在の形で示されたわけではない。Bionは『要素』でグリッドの完成形を提示する前に、オリジナルな「グリッド」を考案している(Bion, W. R.1963b)。そのオリジナル版においては、完成版とはいくつかの相違がみられる。すなわち、縦軸のGカテゴリーは、G4まで表記され、HカテゴリーもH2が載せられている。しかし、完成版では、G2のみが残った。また、横軸のコラム5もオリジナル版では、エディプスOedipusと表記されていた。

さらにFerreiraは、Bionのグリッドに“新解釈”を施し、Ferreira版グリッドを考案



している。まず、Bionの『注意と解釈』の著作から、Ferreiraは、コラム1の定義的仮説に「定義自体」「定義の否定的側面」「定義的仮説の破滅」の3つの下位分類を導き出す。さらに、コラム5の「探求Inquiry」においてもFerreiraは、Bionの考えから「頑迷さ」と「好奇心」の二つを区別し、コラム6の「行為」も「発達」と「排除」のポジティブな側面とネガティブな側面を区分している。このようにFerreiraは、Bionのグリッドの横軸において、プラス面とマイナス面を選び分けることにより、その使用法の意義を高めようと野心的に試みている。

注2) Bionは、グリッドが難解かどうか尋ねられたとき、こう答えた。「私にとっては難しくはない。ただ、私が出会いそうな事実に対応していないなら、単なる時間の浪費だけだね」(Bion,W.R.1980)。Bionはグリッドを決して“難解”なものだとは自認していなかったようだ。

注3) Bionはこの思考の発達のための装置を♂♀とPS⇔Dを使っても表現している。「♂♀の作用は良性であると仮定し、それが既に示唆したようにAからHのアルファベットの付した軸の生成的な配列に含まれる発達に責任がある」(『要素』)。すなわち、♂♀(コンテインド/コンテナ)の間で交わされる投影同一化が良性であるなら(換言すれば、力動的な結合L,H,Kの性質が良性であるなら)、死の恐怖は愛や寛大さによって緩和され、“空腹”という思考の意味内容の充実として取り入れることができる。このように♂♀の機制の作動による産物が“意味内容”であるなら、その部分対象から全体対象への移行を大外から輪郭付けるのがPS⇔Dの操作である。すなわち、♂♀とPS⇔Dの概念の違いは、思考の生成に関して、思考の“実質”を見ていくのか、思考の“形態”を見ていくかの違いということになる。

注4) 前概念には、ここでいう“思考の分類(カテゴリー)”としての「前概念」と、思考の発達の漸次的なプロセスの中で生じる、次のカテゴリーに対する機能としての「前概念」と、Bionはふたつの用途で「前概念」を使用している。

注5) ちなみに、Grotstein,J.S.(2003)は、投影変形に3側面を見ている。すなわち、対象との融合状態の達成である「混乱状態」、心的苦痛の対象の中への「排泄」、「行動化のまえぶれ」、である。いずれも心的苦痛を否認するのを目的とする。

注6) Green,A.(1973)は、BionがO概念を提唱したことにより、クライン派とは袂を分かつことになった、と論評している。Greenの理解では、クライン派は「変形された理論」と、「変形を可能にするもの」とを取り違えている。クライン派は前者を大事にするのに対して、Bionは変形前のOへの接近を目論む点で、彼らと進む道を異にした、という。

確かにO概念の出現は、Greenの言うように、『要素』までのBionが認識の極限を目指し、人間精神における科学的思考(「変形された理論」)を追い詰めようとしていた姿から、くると向きを換え、認識の限界を認め、不可知の神秘さを前に“ひれ伏した”かのように見える。だが、Bionは、初期の「精神分析的グループ療法の時代」においてさえ、「原始心的マトリックス」や「こころの原型proto-mind」のような概念を用いており、そもそも“知りえぬもの”への憧憬は根強いのである。Grotstein,J.S.(2004a)やThorner,H.A.(1981)もOは一種のβ要素であり、2機能によって「知りえることのできる」エッセンスに導かれるものだと述べ、β要素という認識論の“落とし子”と不可知の“O”との連続性を見ている。すなわち、Bion精神分析の至る所に、“知りえぬ

もの”としてのOは最初から影を落としているともいえるのだ。

- 注7) Platoの「形相」「アイデア」論には、Bionの言うように、“想起”によってしか知りようのない世界、すなわち、この世の私たちにはもはや戻ることのできない“喪われた”世界という含意がある。この世の向こう側には絶対的真実としての「アイデア」の世界が厳として存在するが、そこは、もはや私たちには到達不可能な“喪失した”世界なのである。このニュアンスが、「不在の乳房」の“喪失感”とも響き合い、後々Bionの「不在の乳房」に新たな“次元”を提供していく予兆となっている。
- 注8) Schermer,V.L.(2003)は、Bionの娘Nicolaとのパーソナル・コミュニケーションを通じて、Bionがヒンズー教の聖典である「マハーバーラタ」を繰り返し読んでいたことを知らされたとのことである。Bionの哲学的素養は、単にヨーロッパ文化圏に留まらない奥行きと広がりをもっている。
- 注9) もっともBionの真実性には、このような“理念的な実体”としてのそればかりでなく、Freud,S.が唱えたような主観的体験（心的現実）としての真実性も含まれている。そのふたつは分けて考えた方がよさそうだ。Bionは、愛する対象と憎む対象が同じであることを理解したときに、“真実の感覚”が獲得されると考えているし、そもそも“不在の認識”に伴う「心的苦痛」も“真実の感覚”に裏打ちされた「精神分析の要素」に他ならない。Bionは“主観的に獲得される真実”とプラトンのアイデア論の“絶対的な真実”の両方を想定していたように思われる。
- 注10) Carere-Comes,T.(2006)も、「生きた経験の本質に至る」という点で、BionのアプローチとHusserl由来の現象学のそれとの近縁性を指摘している。Grotsteinの観点と歩調を同じくするものであろう。
- 注11) Grotstein,J.S.(2000)は、Bionを心的外傷後ストレス障害、すなわち戦争神経症だと“診断”した。Bion自身も、8月8日に「私は死んだ」と『長い週末』(Bion,W.R.1982)に書き記し、その“痛手”の深さを表現している。さらに、Grotstein(2004b)は、Bionにとっての第一次大戦での経験は、Oそのものだったとも言っている。確かに、Bionの戦争体験は、幼少期以来連綿として“反復強迫”されてきたO体験、すなわち「不在の乳房そのもの」の極限に位置付けられるものだろう。
- 注12) 余談だが筆者のこのBion論考自体も、Bionの精神分析の背後にBionという人間の“実存”を起源と考えている点で、反ポスト・モダンのものである。しかし、筆者はDerrida,J.の標榜するような「作者の死」のようなテキストの多義的・差延的解釈では、Bionに対する“感動”の実感の手応えを得られない。したがって、筆者の手法は、Bionの精神分析の背後にBionという“作者”の存在を想定し、その人間像からBion精神分析の由来を探ろうとする、いわば“旧手法”に属すると言ってよいだろう。しかし、そもそも“情動的知識”とは、背後に佇む人間存在の内面から来る“感動”抜きにしては得られないものではなかろうか。Ogden,T.H.(2004)も言うように、それは、精神分析実践において遭遇する“感動”と、全く機を一にするものなのであるし、その点において、精神分析臨床はそもそも“ポストモダン”のトレンドに汲みし得ないのである(Sandler,P.C.2006)。
- 注13) ちなみにGrotstein,J.S.(2006)によると、Bionは‘becoming’と‘identification’の区別をしているという。前者は、アナライザンドとの分離を維持しながらも、アナライザ

ンドの情動に呼応して分析家の内側に生じた情動に 'becoming' することだ、と。それに対して、後者は最初に分析家は自分の内側に喚起された情動に 'becoming' し、その後それとアナライザンドの情緒を比較することだ、と解説している。

#### 参考文献

- Bion,W.R.(1962a): 'A theory of thinking' In:Bion, W.R.(1967): *Second Thoughts*. Jason Aronson, 白峰克彦訳(1993)「思索についての理論」、松木邦裕監訳(1993)『メラニー・クライン トゥディ②』岩崎学術出版社
- Bion,W.R.(1962b): *Learning from Experience*.Reprinted(1984), Karnac Books, In:Bion, W. R. (1977) : *Seven Servants*. Jason Aronson, 福本修訳(1999) : 「経験から学ぶこと」『精神分析の方法Ⅰ』法政大学出版局
- Bion,W.R.(1963a): *Elements of Psychoanalysis*.Reprinted(1984), Karnac Books, In:Bion, W. R. (1977) : *Seven Servants*.Jason Aronson, 福本修訳(1999) : 「精神分析の要素」『精神分析の方法Ⅰ』法政大学出版局
- Bion,W.R.(1963b): *Taming Wild Thoughts*.Karnac Books
- Bion,W.R.(1965): *Transformations*. Reprinted(1984), Karnac Books, In:Bion,W.R.(1977): *Seven Servants*. Jason Aronson, 福本修、平井正三訳(2002) : 「変形」『精神分析の方法Ⅱ』法政大学出版局
- Bion,W.R.(1967): *Second Thoughts*.Jason Aronson
- Bion,W.R.(1970): *Attention and Interpretation*.Reprinted(1984), Karnac Books, In:Bion,W.R. (1977): *Seven Servants*.Jason Aronson, 福本修、平井正三訳(2002) : 「注意と解釈」『精神分析の方法Ⅱ』法政大学出版局
- Bion,W.R.(1977): *Two Papers:The Grid and Caesura*.Karnac Books
- Bion,W.R.(1980): *Bion in New York and São Paulo*.Clunie Press
- Bion,W.R.(1982): *The Long Week-End 1897-1919:Part of a Life*.Reprinted (1991), Karnac Books
- Bion,W.R.(1990): *Brazilian Lectures*.Karnac Books
- Bion,W.R.(1991): *A Memoir of the Future*.Karnac Books
- Bléandonu,G(1994): *Wilfred Bion:His Life and Works 1897-1979*.Free Association Books
- Carere-Comes,T.(2006): 'On:Whose Bion? Who is Bion?' *The International Journal of Psychoanalysis*87, 581-582
- Ferreira,R.B.P.M.(2000): 'The fundamental role of the Grid in Bion's work' In:Talamo, P.B.,Borgogno, F.& Merciai,S.A. (ed) (2000):*W.R.Bion:Between Past and Future*.Karnac Books
- Freud,S.(1911): 'Formulation on the two principles of mental functioning' In:Standard Edition, vol.12, Hogarth Press, 井村恒郎、小此木啓吾訳(1970)「精神現象の二原則に関する定式」、井村恒郎、小此木啓吾他訳(1970)『フロイト著作集6』人文書院
- 福本修(1999) : 「解題——精神分析理論から『究極の現実』へ」、ビオン、W.R.著、福本修訳(1999)『精神分析の方法Ⅰ』法政大学出版局
- Green,A.(1973): 'On negative capability:a critical review of W.R.Bion's *Attention and Interpretation*' *The International Journal of Psychoanalysis*54, 115-119
- Grinberg,L.et al.(1975): *Introduction to the Work of Bion*.Clunie Press,高橋哲郎訳(1982)『ビオ

ン入門』岩崎学術出版社

Grotstein, J.S.(2000): 'Bion's "transformations in 'O'" and the concept of the "transcendent position"' In:Talamo,P.B., Borgogno, F.& Merciai,S.A.(ed.) (2000): W.R.Bion:Between Past and Future.Karnac Books

Grotstein, J.S.(2003): 'Introduction:Bion, the navigator of the deep and formless infinite: overview' In : Lipgar, R.M. and Pines,M.(ed.) (2003): Building on Bion:Branches. Jessica Kingsley Publishers Ltd

Grotstein, J.S.(2004a): 'The seventh servant:the implication of a truth drive in Bion's theory of "O"' The International Journal of Psychoanalysis 85, 1081-1101

Grotstein, J.S.(2004b): "'...Perchance to Dream...": The "Truth Instinct" and the profounder mission of dreaming in light of Bion's contributions' 「…夢を見るやもしれぬ…——ビオンの業績からみた『真理本能』と夢見ることのより深遠な使命」精神分析研究第48巻3号

Grotstein, J.S.(2006): 'On:Whose Bion?' The International Journal of Psychoanalysis 87,577-579

Kurth,F.(1981): 'Using Bion's Grid as a laboratory instrument:a demonstration' In:Grotstein, J.S.(ed) (1981): Do I Dare Disturb the Universe? Karnac Books

Ogden,T.H.(2004): 'An introduction to the reading of Bion' The International Journal of Psychoanalysis 85, 285-300

Sandler,P.C.(2005): The Language of Bion:A Dictionaty of Concepts. Karnac Books

Sandler,P.C.(2006): 'The origins of Bion's work' The International Journal of Psychoanalysis 87, 179-201

Schermer,V.L.(2003): 'Building on "O": Bion and epistemology' In :Lipgar, R.M. and Pines, M.(ed.) (2003): Building on Bion: Roots.Jessica Kingsley Publishers Ltd

祖父江典人(2003):「Wilfred R. Bion研究(Ⅰ)——『不在の乳房』の原体験——」愛知県立大学社会福祉研究第5巻, 19-28

祖父江典人(2005):「Wilfred R. Bion研究(Ⅳ—1)——“抑うつ次元”としての『不在の乳房』——」愛知県立大学文学部論集（社会福祉学科編）第54号, 29-54

Symington, J.& N.(1996): The Clinical Thinking of Wilfred Bion.Routledge, 森茂起訳(2003)『ビオン臨床入門』金剛出版

Thorner, H.A.(1981): 'Notes on the desire for knowledge' The International Journal of Psychoanalysis 62, 73-80